

体育倉庫は 精液の香り

山牧田 湧進



【まえがき】

※【ご注意ください】

- ・この作品はフィクションです。実在の人物・地名・団体等とは一切関係ありません。
- ・この作品は成人ゲイ向け官能小説であり、男性同性愛を語っています。同性愛に嫌悪感を抱く方はご覧にならないよう、お願い申し上げます。
- ・この作品は表現の誇張、強調や省略のある、必ずしも現実には即していないファンタジーであることをご了承ください。
- ・特に作品中の性的描写は、現実の性交渉における性病等のリスクを意図的に排除しています。現実と混同しないよう、ご注意願います。
- ・この作品は想像して楽しんでいただくものです。現実との区別を付けられず、犯罪や迷惑行為に及ぶ危険のある方はご覧にならないでください。

【あらすじ】

今どき流行らない教育実習なんでものをお願いしたのはあの先生、体育倉庫で僕を何度も何度も犯し開発してきた星降先生に再会するため。

同じ学校、変わらない体育倉庫、6年もの期間を空けても配置すら変わっていない体育マット。

お互いに張り切って臨んだ再会セックスはあっけなく両者暴発となってしまふ。

当然、2回戦に突入でしょ、と思う僕に、先生は『精力剤を仕込んでくる』と中座。

ちよっぴり歳を感じて寂しさを覚えながら、2人分の精液に塗れた身体で待ちぼうけをしていた。

大量の精液が特有の芳香を放ち続け、その匂いは倉庫中に充満し、ボロい倉庫の隙間から漏れ出していく。

その特異な匂いに誘き寄せられて、倉庫のドアを開けたのはまだオナニーもしたことが無いという射精未経験の巨漢生徒だった。

オナニーより先にアナルセックスで筆おろしをさせてやると、その生徒は未経験仲間を連れてやってきて、僕はいきなり童貞切り専門の特定保健用教育実習生になってしまったのだった。

【主な登場人物】

・善満 好司（よしみつ こうじ）

物語上の一人称「僕」。経験人数僅か一人にして、その人に再び抱かれる日を信じて尻を育て続けた教育実習生。過酷な運動部の部長だったがにしては当時から肉付きが滅法良く、はっきりと明言はなかなかされないが星降先生大のお気に入りへの教え子でもある。6年ぶりの再会で夢叶ったが、オナニーすらしたことが無いという射精未経験の生徒を2人も筆おろしさせるといってか過ぎるオマケが付いてきた。

・星降 精宏（ほしふり せいこう）

物語上の一人称「俺」。体育倉庫の一部を完全私物化してやりスペースを作り上げたドスケベ先生。善満がこっそり『ブタゴリジャイ』と呼ぶことがある。毎年、食える生徒がいらないか物色しているが、御眼鏡に適ったのは善

満ただ一人だった。が、その物色の成果を生かして、2人の射精未経験生徒を善満の元に送り込む。挿入の技術に特に長けており、尻を慣らす時間が短縮できその分本番や開発に注力することができる。得意技はイッたことを誤魔化してすっとぼけながら続ける『しらばっくれ抜かず続投』。

・大田原 康一（おおたわら こういち）

物語上の一人称「オレ」。肉体は大人（超え）、性教育も受けて射精の知識もあるが、何か踏ん切りが付かなくて今までオナニーすらしたことが無かったという超希少種。小名城とは未経験同盟を結んでいて、大田原が筆おろしを済ませた際に小名城にも筆おろしさせてやってくれとお願いしに来る面倒見の良い子。背も高く横もがちりでややイモ兄ちゃん風。星降先生を超える巨根は善満の奥の性感帯に良く届く。縋りながら果てるのが好きらしい。

・小名城 進（おなぎすすむ）

物語上の一人称「ボク」。大田原の縦を縮めて横を増やしたような同じく立派な体格。顔も決して細くはないが精悍でハンサムな部類。こちらもおナニーを経験する前に筆おろしをすることになった希少種。根元が極端に太くて先細り型のやや短めちんぽだが、包皮がもの凄く長く余る。どういう経緯でそんなふうになったのか、善満のことを『童貞だったらやらせてくれる人』みたいに理解していたらしい。

【目次】

表紙	1
まえがき	2
あらすじ	3
主な登場人物	5
第1章 体育倉庫は襲われる場所	9
第2章 先生、あれから食ってないんすか	18
第3章 やっぱり僕は食われたい	20
第4章 あの匂いが未精通を誘き寄せる	22
第5章 オナニーより先にアナルセックスを	24
第6章 新旧精液ニアミス入れ違い	26

第7章	童貞ならやらせてくれるって噂	28
第8章	超ロング包茎チンカスin	30
第9章	初物2連食い	32
第10章	は盛大な仕掛け	34
第11章	終業修了輪姦パーティ	36
第12章	ウケはやられ過ぎてDSに変わるだろう	38
第13章	体育倉庫は精液の香り	40
奥付		42

第1章

体育倉庫は襲われる場所

久し振りのこの学校はまるで時間を止めていたみたいだ。

びっくりするくらい、何も変わっていない。

この校舎も、この校庭も、……あの体育倉庫も。

6年という歳月は、実は、久し振りというほどの隔たりではないのだろうか？
今ではあまりメジャーとは言えなくなった教育実習。

というか、実は、僕自身も生徒の立場として教育実習生を見たという経験が無い。

そんな、馴染みの無い『教育実習生』として、僕は6年振りにこの学校に通うことになった。

なぜに教育実習なんてやろうとしたのかだって？

そりゃあ、単位とかの問題もあるけど、ブタゴリジヤイ先生がまだこの学校に居る、って聞いたから、かな。

断られることも多々あるって聞いてたけど、あのブタゴリジャイ先生だったら受け入れてくれるんじゃないか、と、思ってた。

何の根拠も無い（無くはない）けど、なんとなくあの先生に対しては、僕はあの先生の弱みを握っている、と、ついそんな気がしてしまうんだ。

あの先生のせいで目覚めさせられたからね、僕は。

というか、刷り込まれたという方が近いのかも。

僕が肉大好き男好きーになったのはあのブタゴリジャイのせいだから。

先生が好きだと気付いてしまった、とか、そんな甘酸っぱい青春なんかじゃなく、
く。

もっと、どろどろとして、むわっとして、熱中症とか酸欠になりそうなくらい、
暑苦しかったからなあ。

……僕はブタゴリジャイに襲われてた。

あの体育倉庫で。

周りは、『やっぱ、部長はこき使われて大変だよな』くらいにしか思っていないかっただろうな。

毎日のように僕だけ居残り手伝いを命じられて、他に自ら手伝いに名乗り出ようなんていう殊勝な部員も居ず、仲の良い同僚も部活終わりだけは一緒に帰ることを諦めて先に帰ってしまう。

先生と僕は人っ子一人居なくなった校庭の端っこを歩いて体育倉庫へ。

体育倉庫の管理責任者は当時からブタゴリジャイ先生だった。

だから、先生が鍵を持ち出しているても、先生がいつ体育倉庫に来てても、誰にも何の疑問も抱かれなかった。

当然、一緒に付いて行く僕は誰がどう見ても手伝い要員、ただの使いっぱだった。

……ただ、手伝うのは体育道具の整理整頓ではなくて体育教師の性欲処理。

ただの使いっぱであることは何も間違っただけでもない。僕はただ一人の先生の使いっぱでもあった。

先生あるとき、毎日のように僕に居残りさせたもんなあ。

「お前、今度からノーパンスカートで来いよ。そしたらいつでもどこでもすぐにやれるだろ」

なんて、ふざけたことを平気で言う人だった。

残念ながら、男にノーパンスカート、という文化はこの国の民族には無いんだよなあ。

修学旅行のときにも、『思い出づくりだ』なんて言って、班ごとに組んでお土産屋廻る時間に僕を離脱させて、病人や体調崩した人だけが出掛けずに残るホテ

ルでエッサホイサされてた。

「お前が買うはずだった分はもう用意してある」

って、お土産一式をまとめてくれたけど、センスがオヤジで、とても僕が自分のセンスで選んだお土産とは思えない品揃えだったのを覚えてる。

でも、今になって思うと、先生はただのやりたがり魔ではなくて、僕を開發して、育てようとしていたのだとも思う。

なぜ、僕なのか、僕だったのか。未だに理由はさっぱり分からないけど。

「俺のちんこが無いと生きていけない身体にしてやるからな」

はまだ、ただのやりたがりでも言いそうな感じではあるけれども、

「痛かったら、ちゃんと言葉にしろ。気持ち良かったら、素直に顔に出せ」

ってというのは、一方的にやる人が言える台詞ではない気がする。

あの人、服脱ぐときに僕を床に座らせたりして、僕の目の高さを下げさせるんだよ。

そうして、僕の目の前で、微かに玉と竿の形が浮き出て見えているような気がするもっこりのジッパーをゆっくりチィーっと下ろすんだ。

何はともあれ、必ず絶対最初はコレ、なんだ。

実際、その後そのままちんぽが出てくるばかりとは限らなくて、普通に他の場所から脱いだりすることもままあるけどね。

何れにせよ、もっこりジッパーじりじり下ろし、は、すっかり僕のフェチにもなってしまった。

実際のところ、全裸になるというところまで脱ぐことはそうそう無くて、股周辺だけ、なんてこともざらだったわけだけれども、先生のブタゴリジャイらしいがっしりとした腰回り腹回りは妙にエロくて、というか、それらが本当にエロいということは何度も何度も具体的に叩き込まれたので、すっかり男肉大好きいに

なってしまうて。

ただ単に太っているとか、だらしなくメタボってるといふ感じではなくて、どこか遅しくて、必要なものを必要なだけ蓄えた結果の膨らみであり、張りであり、垂れであるように見えた。

あの体育倉庫は、決して人目に付かないような隠れた場所にあるわけではないのだが、存在が地味で。

すぐ向こうの林、少し離れた隣のプール、という、より存在感の強いものに囲まれていて目立たないんだ。

これがもし、もっと隠れた場所にあったとしたら、ひよっとしたら逆にヤバかったかもしれない。

絶好のヤリ場と見定めるヤツが増えて、ひよっこり他の生徒や先生と鉢合わせなんかしてしまったりして。

もちろん、倉庫の中にまで入ってやるには倉庫の鍵を扱える先生が絡まないと

無理だろうが、物陰だらけの周辺でおっ始めようとするヤツらが居るといふ可能性だってゼロではないかもしれないからね。

……、ってのは考え過ぎかな？

何れにせよ、あの体育倉庫には、何回も何回も仕込まれた歴史が詰まっている。

誰も見向きもしない地味なプレハブだけど、僕と、多分あの先生にとってだけは、プールよりも校舎よりも体育館よりも、真っ先に目が向いてしまう特別な建物だ。

(こちらは体験版です)

第2章

先生、あれから食ってないんすか

(こちらは体験版です)

第3章

やっぱり僕は食われたい



(こちらは体験版です)



第4章

あの匂いが未精通を誘き寄せる

(こちらは体験版です)

第5章

オナニーより先にアナルセックスを

(こちらは体験版です)

第6章

新旧精液ニアミス入れ違い



(こちらは体験版です)



第7章

童貞ならやらせてくれるって噂

(こちらは体験版です)

第8章

超ロング包茎チンカスin



(こちらは体験版です)



第9章

初物2連食い



(こちらは体験版です)



第10章

は盛大な仕掛け



(こちらは体験版です)



第11章

終業修了輪姦パーティー



(こちらは体験版です)



第12章

ウケはやられ過ぎてドSに変わるだろう

(こちらは体験版です)

第13章

体育倉庫は精液の香り



(こちらは体験版です)





体育倉庫は精液の香り

OpusNo. Novel-068
ReleaseDate 2020-09-16
CopyRight © 山牧田 湧進
& Author (Yamakida Yuushin)
Circle Gradual Improvement
URL gi.dodoit.info

個人で楽しんでいただく作品です。
個人の使用範疇を超える無断転載やコピー、
共有、アップロード等はしないでください。
(こちらは体験版です)